

---

# 白と黒の姫君

天狗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白と黒の姫君

### 【Nコード】

N8186V

### 【作者名】

天狗

### 【あらすじ】

とりたてて特徴の無い僕の目の前に、突然現れた人物からの言葉。「助けてください」  
今まで築き上げたものが音を立てて崩れていく、そんな感覚を味わっていた。

## 出会い

何故こんな事になったのだろうか。

お世辞にでも巡りの良い頭とは言えないが、それでも必死に考える。

考えていなければ、何かをしていなければ、この状況に押し潰されてしまいそうだった。

そうだな、まずは現状の確認を優先するべきだろう。

ここは僕の部屋だ。長年、といっても二十年にも満たない時間だが、生まれてからずっと世話になっているんだ。見間違えるなんて有り得無い。

この混乱の理由は他にある。

部屋にいるのは僕だけではない。そしてその人物こそが全ての元凶だった。

「助けてください」

その人物の声だと理解するのに数秒ほど必要だった。

「私を、助けてください。お願いです」

僕の沈黙を否定と受け取ったのか、もう一度、さらに丁寧に言われてしまった。

「ちょ、ちよっと。いきなり言われても、その、困るん、だけど…」

…

今の僕に必要なのは現状を整理し、受け入れる時間だ。

僕が返答すると、何かに気付いたような表情になり、すぐにもとの真面目な、酷く切実な顔に戻る。

「そうですよね。いきなり言われても訳が分かりませんよね」

そうして説明が始まった。

小一時間に及ぶ説明を聞き終わった感想は、自分の頭がおかしく

なったのか、目の前の人物の頭がおかしいのかの二択だった。

あまりに荒唐無稽でとても信じられない。

確かに、目の前の少女の容姿は現実離れしていて、幾ばくかの説得力はある。

実際に見たことは無いが、銀糸と言う単語を連想させる白銀の髪は、腰まで届くかと思わせるほどに長く、絹のような光沢を放っている。

顔の作りも、街を歩けば大半の男が振り返る程に整っている。

白状するなら、一度も異性が侵入したこと無いこの部屋に、目の前に美少女がいることに落ち着かない。

嬉しい、誇らしい気持ちも多分にある。けれど、それ以上に恥じらいと戸惑いを隠せないでいた。

向こうは自身の容姿に自覚がないのか、僕の動揺を勘違いしている感だ。

僕の尊厳の為に誤解はこのままにしておきたい。

向こうが気付いていない振りをしているなら、それはそれで切り出すのも意味が無いのでやはりこのまま放置するのがベストだと判断。

なら次に考える事は、真偽の見極め、か？

他人の嘘を見抜くなんて事はできないけれど、少なくとも真摯な態度だと感じた。

仮に僕を騙す事が目的だとして、見抜かれない演技力を持っているのならさつきと同じ理由で無意味。

なら僕を騙すメリットは……。

と、これは考えを巡らせるまでも無い事だ。

僕を騙す事のメリットなど、相手が愉快犯でも無い限り有り得無いだろう。

それに、愉快犯としても僕よりもっと相応しい人間を騙すだろう。

そうすると、先程の説明が俄かに現実味を帯びてきた。

しかし、外国ならまだしも『異世界』？ ましてや『世界を救う』？

虚構の世界ではありふれた話だろうけど、それが目の前の現実だと言われてすぐに、はいそうですかなんて言えたら、そっちの方がどうかしてる。

しかし、考えるほどに反論材料が減っていき、とりあえず信じる事にした。

実害出るのならその時に考えればいいや、と。

後の理由は思春期男子の悲しいサガだった。つまりは可愛い女の子の願いを断りきれなかったのだった。

## 出会い（後書き）

いろいろ手探り状態です。

完結はしますが、どれほどの長さになるかは決まっておりません。

## 彼女の誇り、貴族の誇り（改）

「分かったから。君の言う事を信じるよ」

彼女を信じる事に決めたのだが、お互い自己紹介をしていない事に思い至った。

「えっと、僕は月ヶ瀬友。君は？」

「メルキオール・ジュリエス・シルバルト・グラムヴェインと申します」

予想はしていたが日本人じゃないことが確定した。少しだけ気が重くなったが、一度信じると決めただ。そう自分を奮い立たせる。

「メルキオールさん、と呼んでいいのかな？」

「構いませんよ。親しい者はメルルとも呼びます」

「分かった。それじゃメルルさんと呼んでも大丈夫？」

「はい。貴方の事はツキガセでいいのかしら？」

「違う違う、月ヶ瀬は家名。友でいいよ」

「分かりました。ではユウと」

さて、これで相手と呼ぶのに不自由はしなくなった。

一番気が重い事から聞いていこうかな。後回しにしても嫌な事には変わらないし。だったら、先に聞いてしまえば、他の話で気が紛れるかもしれないし。

「それじゃ、メルルさん。質問なんだけど」

「なんでも聞いてください」

「メルルさんって、もしかして貴族か王族？」

「はい。グラムヴェイン王国の第一王女です。王位継承権は三位です」

一気に気が重くなった。気後れしたと言ってもいい。

「お姫様なんだ……。それなら敬語使わないとマズイよな」

「気にしなくていいですよ。こちらは頼み込んでいる身ですので」

「そう言って貰えると助かる。敬語は苦手なもんで」

正しく僕が現代に生きている証であった。社会人になればそうも言っていられないのだろうけど。

あまり向こうの世界の事を聞いても一度じゃ覚えられないと判断し、重要な事だけを聞くことにした。

「さっき説明してもらったばかりで悪いんだけど、一度じゃ覚え切れなくて。とりあえず、世界を救うって、一体何をすればいいの？」

「私は大賢者様から言われた事しか分かりません。詳しい話は大賢者様から伺っていただくしか……」

「それじゃ、分かる範囲でいいから教えて欲しい」

「それでしたら。今私どもの世界では魔物の異常増加、そして凶暴化が問題になっております」

それはお約束すぎるだろ。と無粋な突っ込みはせず黙って聞く。

「大人しく友好的な魔物が人々を襲い出し、元々凶暴な魔物はその数を増やしております」

「国王達は何か対策を？」

「当然です。民あつての国。民を守る事は、王と、それに連なる者達の義務です！」

理由も無く、人々が心の底から笑い合ってるいい国だと幻想した。僕が住んでいるこの国も、メルルさんのような人が舵を切っていたら……。

やめよう。あまりに意味が無い。

だから、抱いた思いを素直に口にする。

「いい国なんだね」

「ええ、私達の誇りです」

そう言って微笑むメルルさんはとても綺麗で、僕は呼びかけられるまで見蕩れてしまっていた。



## おねだりお姫様

「ユウ？」

「……うつ、うん。何？」

「先程から、私の顔をずっと見詰めておりましたので、如何致したのかと」

君に見蕩れていた、なんて言える訳ないだろ。そんなセリフ言う奴居るのかよ。

居たとしても、それは断じて僕じゃない。

「うつん、ちよつと考え事」

「そうでしたか。差し支えなければ聞いてもよろしいですか？」

「うん。どうして僕なのかな、って」

「ええと、上手く説明できないのですけれど、あえて言うのなら、勘、なのでしょう」

「勘？」

あまりに予想外すぎてアホみたいに聞き返していた。

「ええ、ユウならなんとかしてくれる。そんな予感を感じたんです」

「は、はあ。そうは言ってもねえ……」

体力も身体能力も平均男子高校生並みの僕が魔物と戦うとか、どう考えても無謀でしょ。疑問に思わずにはいられない。

小学生の頃なら、きつと喜んで行っただろうな。誰もが悪者を倒すヒーローに憧れる年頃だし。

けれど、高校生ともなれば自分がヒーローになれないことを自覚し、その思いを胸の奥に仕舞いこむのが普通。

駄目だ、考えても仕方ない。何か別の事したほうがいいな。

でも、何をしたらいいんだろう？

「あの……」

自分の考えに没頭する前にメルルが申し訳なさそうに口を開いた。  
「よろしかったら、街を案内してもらいたいのですけど」

「理由を聞いてもいい？」

「王族の一人として、他の文化に触れ見識を深めたいのです」

ああ、つまりは観光したいって事ですね。

さつきから妙に落ち着かないと思ったら好奇心を抑えられなかっただけですか。

ため息を一つついてから答えた。

「分かった。けど、暗くなる前には戻ってくるよ。それでもいい？」

「是非っ！」

あーもう、分かったからそんなに瞳を輝かせないで下さい。

貴女は仮にもお姫様なんでしょうに。

「それじゃ出かける準備しようか」

「準備は出来てます！」

いや、貴女ね。そんなドレス姿で街を歩いて、何処のパーティーに向かうんですか、って話ですよ。

残念ながら、女性物の衣類を所持している特殊な人間ではないので、着替えてもらう訳にはいかない。

それでも、男物のパーカーを羽織れば何とかなりそうかな。

僕自身も変に着飾るよりはこのままの方が良さそうだな。

「メリル。悪いけどコレ羽織って」

物珍しそうにパーカーを受け取るメリル。

一応、僕が持っている中では一番高いヤツを渡した。勝負服と言ってもいい。考えると哀しくなるので今は考えない事にする。

メリルの方を見る。

うん、スカートは隠しようがないけど、ワンピースと言い張れなくは無い。

それでも目立つ事には変わりないけどさ。なんとかなるでしょ。さて、出かける事にしますか。

少しだけ、誇らしい気持ちで玄関へと向かう。

美少女と出かけるだけで、ご機嫌になれるお手軽な僕であった。

おねだりお姫様（後書き）

いよいよお姫様とお出かけ。

新キャラも登場する予定です。

ユウとメルルはどうなるんでしょうね？

## 観光？デート？

さてと、出かけるという結論に問題はないのだけれど。逆に、密室でメルルと二人きりの方が問題がありすぎる。

ただまあ、メルルに何かをしてしまったら色々終わりそうだなんとなくだけど、そんな気がする。

「そういえば、メルル。今更な質問なんだけど、急いで戻らなくても平気なの？」

「本当はあまりゆつくりはしてられないのですけれど……。でも、元々すぐに見つけられるとは思っていなかったので、少しくらいなら」

お城から出るのも初めてですし、と目を輝かせながら微笑む。僅かに見せた難しい顔が気になったけれど。

そんな風に言われたら、楽しませなくなるに決まっている、誰だって。

でもなあ、はっきり言って僕の住んでところは田舎だ。ドが付くほどの田舎と言ってもいい。

若者が遊べるような場所は無く、あるのは山と海といった自然ばかり。

電車で一時間ほど移動すれば大きな市がある事にはあるが、人が集まる場所はトラブルも多くなるわけで。メルルの所為ではないのだけれど、トラブルの方から舞い込んできそうだな。

必然的に条件は厳しくなる。人が少なく、けれど何かが特別な場所。そんな都合のいい場所なんて……そっか、あそこがあったか。「メルル、淹って見た事ある？」

「タキ、とはなんですか？」

「それは見てのお楽しみって事で」  
そう悪戯っぽく笑ってみた。

20分程バスに揺られて、着いた先は山の麓。ここから徒歩で10分くらいで滝が見れる場所に行ける。

予想はしていたが、それ以上にメルルは目立っていた。バスを待っている間、ずっと視線が集まっていたのだ。

だから、バスに乗り込んだ時、他に乗客がいなくて助かった。逃げ場の無い空間で目立っているのは気が休まらない。

本当に、今だけはここが田舎であることに感謝したいくらいだった。

バスから降り、砂利で舗装された山道を二人で歩く。特に会話は無いのだけれど気まずい沈黙ではなく、気持ちの良い静寂というか、興味津々に付いて来るメルルを見ただけで何故だか楽しかった。

しばらくすると遠くから音が聞こえる。目的地に近づいている証でもある。

ほら、見えてきた。

木々が途切れ、開けた場所に出る。轟々と流れ落ち、舞い散る水しぶきが光を受け、小さな虹を作り出す。

隣でメルルが感嘆の声をあげる。

「これが、タキ……」

素直に感激され、誇らしいような、気恥ずかしいような複雑な気分を味わう。

「ここから下に下りて行けるけれど、行ってみる？」

感極まって言葉が出てこないみたいで、大げさに、何度も首を縦に振る。そんなメルルに思わず噴出してしまい、途端に顔を赤らめそつばを向いてしまう。

機嫌損ねちゃったかな。そう思いつつメルルを盗み見ると、目を輝かせながら滝を見詰めている。どうやら先程の行動の照れ隠しのようだ。

そんなこんなで階段を下り、間近で滝を見る。ひんやりとした空気を思いっきり深呼吸する。

景色に見蕩れているメリルをそのままにして、滝から少し下流の岩場まで行き、ズボンの裾を捲くり、靴を脱いで素足を水に入れる。山歩きで火照った体に心地よい。

あまり誉められた行為ではないけれど、僕達の他には誰もいないので少し位問題ないだろう。

そんな僕の様子に気付いたメリルがこちらに向かってくる。

隣まで来て、僕の真似をして足を浸す。たくし上げられたスカートから見える白く綺麗な足が目に入り、いけない事をしている気分になり目を逸らす。

何を話していたか覚えていないのだけれど、体が冷えてきたので帰ることにした。山の気温は下がりやすいのだ。ましてや、滝の近くともなれば夏でも天然の冷蔵庫だ。

名残りを惜しみつつ帰り道を歩き、バス停近くの商店で二人分のアイスを買ってバスが来るまで時間を潰す。

僕の記憶には滝より綺麗な映像がいつまでも残り続いていた。

## 観光？デート？（後書き）

大変お待たせして申し訳ありませんでした。

もう、何も言っても言い訳です。

ちゃんと完結しますので、気長にお付き合いして頂けたら、と思います。

あ、大幅に修正する可能性もあったりします。  
重ねて申し訳ありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8186v/>

---

白と黒の姫君

2011年9月24日03時27分発行